

# 今、神の社を守るために

ヤシロ・モリ

國學院大學日本文化研究所助教授

茂 木 栄

## 問題の所在

農水省が、「鎮守の森」の復活に今年度（平成三年）から五ヶ年計画で取り組むことを発表した。都市近郊の、開発などで荒れかけている農村の「鎮守の森」二十五ヶ所を選び、緑の空間を整え、産直品の販売、動植物とのふれ合いなどができる施設の建設、農村と都市の住民の交流を図る計画であるという。

数年前の政府の調査によれば、日本本来の植生である照葉樹の森は、都市域においては、もはや神社の森以外見いだせなくなってしまったという。鎮守の森の認識において、マスキミヤ一般の人々に誤解があるのは、偶然、神社に自然の森が残ったと考えている点である。つまりほっておかれたことが幸いし、気が付いてみれば貴重な照葉樹の森が神社に残っていたという認識である。鎮守の森の価値がわかっていない。

神社の森は古い樹木ばかりが残った森ではなく、作り育てられた「社<sup>社</sup>」（もり）である。多くの時間と労力、心、資金が注ぎ込まれて育てられた大切な「社」なのである。

最近まで、猛烈な勢いで迫る開発・再開発の嵐の中で、自然破壊、環境破壊、根こそぎの緑の破壊を、何の苦痛も伴わずにやっていたのけた国・企業・人々に巢喰う経済合理性という魔物に対する孤立無援の挑戦を行ってきた神社人にとって、国が神社の杜の精神的な重要さを認識してくれての政策実行だとしたら、喜ばしいことである。しかし一方、環境保全・整備をないがしろにしてきた行政上の行き詰まりを打開するため、神社という存在が、公共性を持っているという側面から、これを逆手に利用し、安易で無責任なその場かぎりの政策によって、神社境内の宗教的な尊厳を壊し、宗教施設としての存立の危機に瀕するまでに傷つけられた神社が過去多数あったことも声を大にして叫ばなければならぬ。

神社境内地は道路拡張や公共施設建設用地として、目を付けられやすい。神社の杜の聖なる施設としての尊厳など歯牙にも掛けない担当者にあたりたり、立木一本一本の建築用材としての経済的価値のみを主張する態度、行政側の無理解や理不尽な要求など、神社人としていかに対応すべきか、途方に暮れるような事態が最近まで多くあったことを見聞きしている。今でも、こうした状況に直面している神社が全国には多数あるにちがいない。

七月五日発行の『神社新報』に次のような内容の記事が掲載されていた。昨年一年間の境内地処分積が東京ドーム四十個分、しかもその多くが公共事業関連だという。この記事が示す恐ろしさは、建設関係に携わる公共団体の役人達にとって、神社の境内や森は、田や畑、雑木林や宅地と同質の単なる道路用地、建設用地としてしか映っていない現実を明らかにした点にある。

十年以上も前の古くさい都市計画に沿って道路の拡張工事が進められ、境内地を有無を言わず削り取られた神社や、これから削り取られそうな神社を、私は幾つも知っている。また、御祭神がイカに乗って影向された神社前の浜が、たいした経済効果も期待できないままに埋め立てられようとしている例など、神社の宮司のみ孤立無援の反対運動を行なっている悲しい状況を目の当たりにし、考えれば考えるほど怒りがこみ上げてくる。いったいこの国は何

処へさまよい出ようとしているのか。

時の政権の横暴や時代の荒波に耐えて、古くから存在し続けている神社を、この時代の、一時の金銭と引き換えに、精神性と聖性をはぎ取られたお社・境内にされないうために、私はこの文章を書くことにした。これは論文ではない。本論は、公共の奉仕を唱える神社に対して、拒否のできない公共事業への協力という、殺し文句を突き付けられた場合、神社の被害を最小限にとどめるための神学的シナリオの一つを示したものであるという読み方をしていただきたく思う。神の社（ヤシロ・モリ）の価値を、都市計画実施当局に少しでも理解させることができれば、聖なる施設としての神社に対する対応の仕方も自ずから変わって来るであろう。最大の譲歩をした場合でも、最低限、神社としての聖性の維持を、第一に優先した保護の保証を認めさせる為の資料としてこの拙文を書くこととした。

神社は、これからも時代を超えて存在し続けなければならない世界史上の宝である。

日本のため、世界のために、今、神社境内に道路を通そうとしたり、境内を削り取ろうなどとすれば、その宗教施設として、地域社会に暮らす人々の精神的支柱としての聖性を守るために大きなコストがかかることを行政当局に示すべきである。合理的なコスト計算ができるなら、神社境内を道路用地にかけたり、境内を行政の為に利用しようといったことは、少なくなるはずである。そのための材料提供を本論は目的としている。そのために上記の目的に使用する限り、本論の引用、切り貼り、転載はこれを妨げない。

### 神の社（ヤシロ・モリ）とは

四月七日（第一日曜日）、紀伊半島の和歌山市に鎮座する伊太祁曽神社の「木祭り」が行なわれた。ご承知のように、この神社のご祭神は、五十猛命。木の神様、植林の神様である。大昔、木の種をもって五十猛命がこの地に降臨され、この地から日本全国に木を植えてまわったという神話が、この神社の創建の由緒となっている。紀ノ国の国名もこの

神様に依っている。『日本書紀』には、「素戔嗚尊その子五十猛命をして樹種を周ねく大八洲國に植えしむ。即ち紀伊國所坐大神是なり」と記されている。紀伊國すなわち木の國である。C・W・ニコル氏が紀ノ國を汽車で旅した時、見事な照葉樹の森を車窓から見て、「これこそが木の國の名の起りだ」と感嘆されておられた(C・W・ニコル [TREED])。

実は、伊太祁曾神社の旧社地は、小高い丘の上にある。余り知られていない事実であるが、この小高い丘こそ、巨大倒木の化石化したものであり、かつては、その丘の上に五十猛命が祀られていた。いまでも、岩土の露出した崖には、大きな年輪が地層のごとく幾何学模様を描いている。大昔のこの巨大神木こそ、木の國の名の起りである。後に、この神社が日本全国の木の様子の中心的神格となる必然性が、この歴史上稀に見る巨大木に存していたことは、明白である。このことは、神社という存在が、歴史時代を遙かに超えて存続し続けていることを実感させてくれた。

神道においては、何も大樹ばかりがご神木であったわけではない。若木といえども、樹木は神靈の宿る依代として大切にされてきた。天龍川流域伊那谷地方や九州山地の村々には、モリの神様が宿るモリ木がある。多くは大木ではなく、何の変哲もない常緑の若木である。すなわち、枝の一本、葉の一枚も採ってはならない木であった。

モリが単純に森のみを意味するのではなく、木がなくとも神威を感じさせる場所や石などという例が大和地方にもある。また、『万葉集』には神社をモリと読ませる例が三例以上、社の字を当てる例が七例以上ある。不思議にもまだ『万葉集』には社の字は使われていない。西宮一民氏は言う。(「社と社の文字について」『神と社』神と社刊行会刊、昭和五十一年)

万葉人が神の坐す森を「神社」、「社」と記したのは、この漢字が日本語のモリに適うと認めたからに他ならない。そして、一般的な、神の存在が認められないモリとは、文字の上で森を用いて区別したのである。

しかるに彼らは、ヤシロという日本語についても「社」の文字を用いた。ヤシロとは、「神を祭るために仮小屋を設けた一区画」を言ったもので、「神の屋の領地」の意である。神の屋は祭り毎に設けたが、終われば撤去した。ただし、聖地（敷地）はそのままに残した。後に、この神の屋が撤去されずに、かえって建築美を加えていったのが、今日の「神社」である。

また、藺田稔氏は、神社について次のように述べる。（「神社と社会」『日本宗教事典』弘文堂刊、昭和六十年）

神道にとって神社はその中核でもあり基盤でもある。神道の古典的形式は神祇祭祀、つまり天つ神・国つ神の祭にあるのだが、その祭の場が一般にお宮ともお社ともいわれる神社だからである。

神社とは文字通りで言えば神の社、神の宮すなわち神殿であって、要するに神の鎮まる神聖な家である。ところが本来の意味から言えば、神社は確かに神を祭るべき場ではあるが、社殿つまり聖堂のような人工の建物ばかりさすのではない。むしろ社殿とその境内を全体とする聖地そのものをさすと考えるべきであろう。

神社は元来、日本語で神のヤシロ、神のモリと呼んできた。漢字で「社」とも「杜」とも書く。「社」は古代中国では土の神を意味していた。日本の古語でいうヤシロとは、むしろ屋代或は宮代であって、社殿そのものではない。社殿の建つべき場所、祭にあたって神を迎えるべき聖所の意味であった。モリはいうまでもなく樹林の森、こんもりと盛り上がった樹木の群落である。今では「鎮守の森」とか「社叢」ともいう神社に固有の境内林をさすが、本来はおそらく森自体が神の鎮まる印であった。古代中国の文字での「杜」は、ヤマナシという植物の名か、杜甫で知られる一族の姓でしかない。この文字を借りて日本であえてモリと訓み、土地神の神聖な森を表現するものとした。これは決して誤用ではなく、意識的な転用であった。つまり神社は、神の鎮まる森そのものであったのである。

しかし神社はまた神を祭る場でもある。人々が祭によって神々と交わる場所である。

社も神社も、ともに神殿を含んで神域全体を意味してモリと読ませている。今日の神社に引き付けて言えば、神社にとって境内の樹木が大切であるばかりでなく、神の坐ます社殿と土地も同様に大切なものであり、これらの全体を伝統的にモリと表現しているのである。また、藺田氏が説明するように、後にはこれに「杜」の字を当てるようになり、その概念を独立させたのであった。

すなわち、環境問題で発言する神職達の「鎮守の森をまもろう」というキーワードをとらえて、「森を守りさえすれば、建物はどうでもいいんだ」というような揚げ足とりをする輩が行政の末端にはいると聞く。彼らには、こう言うてやろう。「お社とは、場所と樹木と社殿の総体であり、その総体を伝統的にモリと呼ぶのだ」と。

森林文化を専門にしている筒井迪夫氏は次のように述べる。「人間の幸せは自然を支配する人間の知を確立することによってもたらされるとした近代の科学は、華やかな機械文明を創り上げてきた。しかし、現代では文明の所産である機械が自然に対立し、自然を破壊し、それを創り出した人間をもその支配下におこうとしている。荒廃した自然を前にし、また素漠とした人間精神の現状を前にして、人間の豊さ、幸せがあらためて問われるようになっていく。」(『山と木と日本人』朝日新聞社刊、昭和五十七年)

筒井氏はまた、昭和五十八年、神社総代会において「近代文明と緑」と題する講演を行なっている。その中で、近代文明の弱点として自然との対立的な関係を指摘している(『護れ鎮守の森』神社新報社編刊、昭和六十年)。

私たちは非常に大きなものをこの近代思想の代償として忘れて来てしまっているのではないか。非常に大きな穴があいてきてゐる。それは何かといひますと、これはひとことで申しますと「人間精神の荒廃」といふことだとはいへると思ひます。

日本人は、もともとこのような西欧近代思想とは異質の自然との調和を最も尊重する文明観を持っているがために、一つの文明を崩壊から救う道を見いだせるかも知れない。伝統の心、とくにその心の象徴である鎮守の森の守護育成

の運動には、その可能性がある、というのが筒井氏の結論である。

フランスの初代文化相、アンドレ・マルロー氏は、戦後の日本をおとずれて、昭和三十六年（一九六一）の日仏会館落成の講演において、「二十世紀の人類の最大の発見は、異なった文明が地球上に複数存在することを認識した」と述べた。「私は、自然に感動したことのない人間だったが、紀伊熊野の自然に深い感動を覚えた。それは、その中に日本の心を見たからだった」と付け加えたという。おともをした者によれば、その光景は、熊野那智大社の瀧の前で、曇空が晴れ、突然陽光が差し込んで那智の滝を照らし出したのだという。その時マルロー氏は呆然と立ちすくんでいた。そしてひとこと「日本の神を見た」と言ったのだという。

## 神の社の価値

日本は第二次世界大戦に敗れた結果、日本の伝統は何もかもが悪いもの、封建的なものとして葬り去るような教育が、学校でマスコミで社会で徹底して行なわれた。権利を要求するだけで義務を果たすことを教えない。社会に生かされている人間の本质を否定し、個人勝手に生きることこそ今後の新しい生き方であるというような異質の価値観を教育の場で強制した。杜（モリ）の問題も突き詰めていけば教育に突き当たる。緑が無くなる前に、すでに日本人の心がずさんでしまっているのである。

こうした状況の中で、いかにして神社の杜を守るか。

神社関係者は、信仰として樹木の大切なことを知っている。もちろん誰が助けてくれなくても、自分たちだけでも必死で緑の保護に力をいれてきた。今後も続けていくことだろう。しかしそれだけでは力が足りない。猛烈な勢いで迫る近代合理主義と開発の嵐の中で、神社人だけの力で流れを変えることは不可能に近い。西欧化した生活を理想としてしまったかのように見える日本人の心の中にも、伝統的な日本人の思想を再評価しようとする動きが出てきて

いる。自然破壊、緑の破壊に対する孤立無援の挑戦を行なってきた神社人にとって、これからの人々への語りかけが重要になってくるであろう。都市部における照葉樹の森は、数年前の政府の調査によれば、もはや神社の杜以外見いだせなくなってしまうとある。

神の杜が地域社会の活性化、再開発の名のもとに狭められて行く現状に平成二年五月十四日付けの『神社新報』社説（主張）は警鐘を鳴らしていた。いかに為政者達の無理解を神社人、氏子達の努力で補ってきたかを記している。少し引用してみよう。

明治四年の社寺領上知によって神社は広大な自然環境を一挙に失った。今でこそ神社といえば社殿と参道を囲む「現有境内地」という観念が一般化しているが、上知令以前の神社の「境内」とはもっと概念の広いものであったのだ。山林や田畑があり、小川が流れ、そこで人間は神々と共に生きてきた。だが、神を恐れぬ官僚たちは、神社の境内地を他の封建的土地所有と同一視し、社殿が納まるだけの境内地があれば充分であるといつて、他の一切の境内地（山林・田畑等）を強制的に公収したのである。

しかし、戦前までの神社人や氏子たちは、少しでも昔の境内地に近づけようと努力し、民有地となった旧境内地を買い戻し、さらには国にその返還を求め続ける運動を絶え間なく行った。

こうした先人の努力の賜物が現在の神社境内地なのだ。そしてそれを確固たるものにしたのが、戦後設立された神社本庁による国有境内地の無償譲渡あるいは時価半額の払い下げ運動であった。（略）神社人はこうした先人の努力に応えるべく、神々の鎮座する大事な境内地を子々孫々にまで守り伝えていくべきではないのか。土地・自然の乱開発、それによる一獲千金の風潮は、大地をうしはく神々および神々を信ずる者の共通の敵との認識が必要なのだ。

これは、阪本是丸氏の筆によるものであるが、実態経済を遥かに超えたいわゆるバブル経済のピークにあった時期

の主張である。こんにち、昨年までの金融機関の不正が次々と明るみにでてくると、その主張の正しさが実感される。神社には、土と多くの樹木と神殿が必要不可欠なのである。まさに「神の社」の意である。環境問題と結び付けて鎮守の森の保護を訴える神社界の流れは、少々片落ちのような印象を持つ。あくまで「お社」は清浄な神聖性を、つまり神様を人々に感じさせる場ではなくてはならないと思うからである。

ここで、神社及び神社の杜（鎮守の森）の価値をまとめて列記してみよう。『護れ鎮守のみどり』昭和六十年三月、神社新報社刊、参照）

一、お社の森の最も大きな価値は、その場が季節毎の様々な祭りの営まれる神の庭であるということ。ともすればバラバラになりがちな地域社会の人々の、結束を確認する神聖な場所であること。

二、現在の日本の都市域で、残されている緑の大部分がお社の森である。もはやお社は、都市人にとって、かけがえのない憩いの場である。

三、お社の森は日本人の心を取り戻す場である。一步お社の森に入って、その雰囲気や公園や寺院の林と較べてみるといい。公園や寺院の林が人為的設計図により作られたものであるのに対して、お社の森は自然の形態をもって構成されている。その差、違いが歴然としている。お社の森の本当の力は、足を踏み入れた人々が、自然に清らかな気持ちになり、慈しみあう心を取り戻すところにある。お社の森は、ただ森がそこにあるだけで、人々の心に安らぎと安心を与える。地域住民の福祉の一翼を担った存在である。

四、お社の森は自然との調和、自然の中に見いだされた神を受けて育まれた聖なる森である。お社の森は、現代のように開発の波が幾重にも重なって日本に押し寄せる以前から、存在していた。先人たちの感じた自然の声の教える聖地として、守り畏れられて今日まで来た。逆にいえば、お社の森は人々の心に働きかけ、聖なるものの存在の影を認めさせるものでなければならない。それが全国八万社以上の神社なのである。

大雑把にまとめてみると以上のような価値が認められるが、その根本は、一の祭りの庭であることに集約されよう。横浜国立大学教授宮脇昭氏は、植物生態学の権威であるが同時に、新日鉄の大工場の敷地内を森に変えたことで注目され、現在は、スペインのビルバオにあるUSスチールの大工場の緑化に取り組んでいる実践的な研究者でもある。その宮脇氏がお社の森（鎮守の森）の価値を的確に表現している。「鎮守の森から地球環境の回復を」と主張するその意見を紹介してみよう。（『地球環境の回復は鎮守の森から』『神社新報』平成二年九月三日参照）

われわれ日本人は、限られた島国で、様々な厳しい条件下に、少し我慢しながらも集落や町作りに際して、決していわゆる全面的な緑の消滅や自然破壊を行なわなかった。二千年前に稲作文化が導入されるに及び、縄文時代の狩猟採集文化から定住して、集落、村、町が発達してきた。弥生文化の最も大きな特徴は、川沿いの沖積低地をならし、畔を作り、水をためての水田耕作であった。当時の水田形成は、その時代としては大規模な自然の改変であったかも知れない。しかし他方においてわれわれ日本人は、必ずふるさとの木によるふるさとの森を造ってきた。それが今日なお、都市や集落の中に残されている鎮守の森である。

現代は見えるもの、数字や表で表現できるもの、金で換算できるものだけを対象とした生活がモダンと誤解されている。われわれ日本人の長い生活の歴史を振り返るとき、見えないもの解明できないものは、むしろ畏敬の念を持って守られてきた。それは神宿る場所として、八百万の神々に象徴されるように、日本人の伝統的な自然との共存の姿であった。残念ながら現代では、宗教的な意識が低下し、逆に物質文明があまりにも目先の経済性や利根的な快楽性を求めることに狂奔し過ぎている。伝統的に残されてきた日本人の心のふるさとであり、神宿る社、住む人達の魂の拠点であった鎮守の杜が急速に荒廃貧化を強要されている。

現在、宮脇氏の住んでいる神奈川県を例にとりてさらに話しを進めている。神奈川県面積は、全国土の二百分の一の狭い面積である。神奈川県教育庁の依頼で宮脇氏が調査した結果では、祖先はそこに、二千八百五十もの神社の

杜やお寺の森を創っているという。この森は長い間住む人達の心の広場とし、残し、守り、創り育てられてきた。現在神奈川県人口は八百万人である。人の増えることが市や県の発達のシンボルであるとするなら、東京についても発達したことになる。その結果一千年かかって我々の祖先が創り守り育ててきた鎮守の杜で、現在何とか郷土の天然記念物に指定してもよい程度の樹木は、調査の結果では、四十二しか残っていないのだという。神奈川県民は一千年かかって創り守り育ててきた郷土の森の九十数パーセントをわずかに四十年で消費し尽くして、鉄、セメント、石油化学製品などの非生物的な材料による人口環境の中で人間だけが増えているのが現状なのだと分析する。同様な傾向は日本国土全域にわたって示されているだろう。

最近緑化といえば、ついゴルフ場のような一面的な緑と誤解され易い。しかし永遠に管理費がかかり農業公害のるつぼとしてしか維持できないゴルフ場の芝生と我々の祖先が必ず村づくり町づくりに残し守り創ってきた鎮守の杜とは、緑の表面積が一对二五ないし一对三〇の差がある。しかも土地本来のふるさとの木によるふるさとの森は、大部分が冬も緑の照葉樹林である。海岸沿いではタブノキ、シイ類、内陸では、関東がシラカシ、関西がイチイガシ、アラカシ、沖繩ではオキナワウラジロカシ、アマミアラカシ、などのカシ類である。このような照葉樹林は、単に神社の尊厳性を神宿る森として象徴しているだけではない。それは地域景観の主役であり、住む人達の心のふるさつである。

現代的な意味では環境保全林である。土地の人達が何百年も共存してきたふるさとの木によるふる里の森、鎮守の杜こそ現在の部分的な環境要因測定器よりも、より総合的に命を賭けて地域環境の生きた警報装置の機能を果たしている。また、防音、集塵、空気の浄化機能、あらゆる現代的な意味での環境保全機能を維持しているのも、鎮守の杜に象徴されているふるさとの杜である。

現在、日本各地を調べて最も明らかなのは、土地本来の自然に近い森は、鎮守の杜しか残されていない。日

本の神社の杜こそ、実は世界に比類のない、我々祖先が永い時間をかけて、宗教的な畏敬の心で守り育ててきた最も素晴らしい本物の緑である。きわめて本質的、さらに遣伝的資源としての機能も果たしている。地球環境の危機が叫ばれている現在、我々は下手をすればなし崩しに破壊されかねない日本の鎮守の杜を積極的に、土地本来の照葉樹を主とした神宿る森、同時に地域の人のふるさとの森、多様な機能を果たす環境保全林として残し守り育てていかなければならない。

鎮守の杜は、残された日本文化の拠点であり、魂のふるさとである神宿る鎮守の杜が、その土地本来の潜在自然植生の主木による二一世紀の環境保全林として各神社に積極的に修復、回復、創造されることが強く望まれる。地球環境の回復は、日本の伝統的な鎮守の杜の保全、創造からそのノウハウを世界に広げたいと願っている。

(宮脇昭「地球環境の回復は鎮守の森から」『神社新報』平成二年九月三日)

という宮脇氏の主張は、日本の鎮守の杜は、育てられたものであるにもかかわらず、自然植生が現れている。世界に比類のない森であるという。

その価値を、道路拡張事業や公共の建物建設地に神社の杜、境内地に目を付けたがる(単に都市の中心に近く広い土地が確保できるという単純な理由から)行政当局に認識してもらいたいものである。

### 狙われている神の杜

西欧文明が、人間のもとに自然を従属させ飼いや慣らす思想のもとに、居住環境を作り上げてきたことは、既に指摘した。それは、むやみやたらな自然破壊を意味しているのではない。自然の人間の手による再構成に力が注がれることを意味している。つまり、西欧においては、都市の緑の確保、緑地・公園などの確保は古くから行政の責任であるとの考え方が徹底している。しかし日本では最近はやや変わってきたというものの、国または地方公共団体による

この種の行政が、緑の確保という側面に向けられていないのをはじめ、公園緑地確保という側面からみても、熱意が比較にならないほど低い。その結果、都市などは無計画に建物のみが密集して公共の緑地がほとんど無く、神社の杜が唯一の緑になってしまっているところがたくさんあるというのが現状である。

神社は行政に代わって、市民生活に不可欠な緑地確保の使命を果たしているということになる。神社の公共性ということは、いままで神社の祭りの面において多く論じられてきた。しかし、近代化・都市化が急速に、また統一性・計画性無く進む現代日本にあつては、緑地の確保＝環境保護という側面での神社の公共性も充分認識されるべきであろう。さらに、現在の神社は、都市などにおいては、残された唯一の空き地でもある。地域社会の集会の場所、コミュニティのスペースとしての役割を果たしている。

ところが、この今では日本人の生活に欠かせない役割をになつている鎮守の杜が、公共性を持つているという側面を逆手に利用されて、無責任な行政や安易なその場かぎりの御都合主義によって、破壊の危機に瀕していることも声を大にして叫ばなければならない現実である。

古くから地域共同体の人々の集う広場としての性格を持っていた神社の境内と杜は、社会性を低下させている現代人の社会では、急速な近代化と開発、モータリゼーションの急激な地方への浸透などにより、道路拡張や公共施設建設用地として、すぐに目を付けられる性格がある。そのため、公共用地への転用をしたいとの計画が全国各地で極めて安易に神社に対して提出されてくる。神社としてはもちろん、公共の要求にはできるだけ対応するべきとの意向は持っているものの、鎮守の杜の破壊に直接つながるため、悩みは大きい。しかも、行政側の無理解から理不尽な要求や、鎮守の杜の聖なる施設としての尊厳など歯牙にも掛けない担当者が、立木一本一本の建築用材としての経済的価値のみを主張する態度など、地域行政の能力そのものを疑いたくなるような例が最近までは多くあった。

さすがにこの頃では、鎮守の杜を道路計画から外すなどの配慮がなされるようになってくるとは聞くが、しかし、

やむなく神社本庁へ境内地処分の許可申請が出される件数は多いという。

神社本庁の担当者によれば、神社本庁には財産処分の申請が毎年、千数百件も全国から寄せられているが、先述したようにそれらのうち七割以上が、この種の公共目的に使用するための境内地処分の申請である。『護れ鎮守のみどり』（神社新報社編刊、昭和六十年）によれば、神社本庁では、目先の一時一局の便法で、祖先累代つちかかってきたこの公共性のある緑地の処分をすることは「望ましくない」との立場で将来への展望をも含めて、地域の方々にも充分考えてもらい、協力をして他の方法を考えてもらいたいとの強い指導をしているという。それでも近年は年に八百件近く承認せざるを得なくなってきた。昭和五十五年度の統計では、神社の財産処分の許可件数七百九十七件、そのうち公共団体の行なう公共事業のための処分は全体の七割にあたる五百四十件。処分面積では、全体の九割にも及ぶ百六十万平方メートルもあったという。

このように殺到する公共目的のための境内地処分がこのままのペースで進めば、やがては、世界に比類のない価値を持った神社の社は、近い将来無くなってしまおうだろう。そうなたら日本人の精神的、歴史的、生活環境はどうなってしまうであろうか。社人の努力も虚しく、神社の社の消滅が、日本をも滅ぼす結果となるのであろう。

## おわりに

神社の社は本来孤立して存在するものではなかった。神社の社を囲むような形で残っていた官有林、民有林が、今ほとんど猛烈な勢いで処分され、宅地やマンション、ビル、道路になってしまっていることも、さらに神社の森を危うくしている原因でもある。

神社の社は立地条件がよいために、都市域にあっては、防災拠点作りとか、再開発のための道路拡張などの犠牲になっっている。また、農山漁村にあってはリゾートマンション、ゴルフ場、道路建設などの犠牲になりかねない。

一般論として「地球環境を守れ」とか、「鎮守の社を守ろう」とか抽象的な問題設定をするのではなく、もっと身近な切実な問題に取り組んでもらいたいと思う。

例えば、上記のような犠牲をしいられた場合、経済合理性で神社の境内地の提供を求められたなら、破壊される神社としての聖性を回復できるよう、境内の再構築、社殿の移動、建て替えなどを含め、以前にも増して御神徳が発揚されるような神聖性の維持が可能な保証を確約させなければならない。一方的な犠牲になるのでは、長い目でみた場合、日本の大きな損失になることは疑い無い。境内の再構成というような事態になれば、大変な経済的コストがかかる。そのコストの負担が当局に無理なら、始めから神社の社・境内地にたとえば道路をかけるなどという計画そのものを立案すべきではない。

神社の社、神社境内地の変更を求めることは大きなコストが掛かるということを国や地方自治体に認識してもらわなければならない。そのためには、神社のあらゆる側面からの価値を理論付ける必要がある。これまでも確かに様々な論が出されているが、単発的であり、実際の問題のマニユアルにはなりにくい。神社の社、神社の存在そのものの価値を、適切に論じたテキストが求められている。そのため叩き台にこの拙文が利用されるなら、こんなに嬉しいことはない。

註 「モリ」の表記の使いわけについて記しておこう。

「森」とは、樹林が茂った場所という意で使っている。それに対し「社」は、神の祀ってある森をさす。すなわち、神社の社・鎮守の社という用法になる。そして「社」の字をあてて「モリ」と読ませる場合には、神の坐す社をさらに強調し、神の常在する社（ヤシロ）と社（モリ、本来的にはこの字をあてていた）のダブルイメージを示している。つまり神の社（モリ）という用法になる。本文中に詳述している。